

『源氏物語』 「御法」 卷の主題性をめぐって

—語り手の紫上との一体化の表現に着目して—

呉羽 長

はじめに 一体化の表現について

『源氏物語』の中で、紫上の死と光源氏の悲嘆から出家へと続く一連の叙述の解釈については、この物語を源氏・紫上の愛の物語とした上で源氏の救済を展望する読みがあり、それに対して、出家を志しながら現世に思いを残す源氏の姿に出家不出家の問題が浮上するものとし、その暗い晩年の源氏の迷いが第三部世界を導くとする読みの系譜を上げることができる。

こうした紫上・源氏退場の巻々をめぐる主題性、もしくは二帖に関わる構想的意義について検討する際、この二帖に見られる、語り手が作中人物に一体化する表現を含め、語り手がその姿を露わにする記述に着目し、それを作者の紫上・源氏造型の意識の反映としてみることで有効な視座が得られるのではないかと思う。

『源氏物語』では語り手が草子地などによってその存在を露わにすることがあり、時にそれは執筆時の作者の物語世界に働きかける思いや姿勢の現れとして捉えることができる。その作者の働きかけを示す表現は、作中人物の行動に作用し、主題的狀況と関わりをみせる。本稿では、そうした表現のうち、副題に示したような語り手の「一体化の表現」が「御法」巻の紫上をめぐる現れることの意味を、作者との関係から検討することで、この巻の主題性をどのように捉えるべきか考えてみたい。

一 「御法」巻における「あはれなり」

「御法」巻に入り、死を予感する紫上は出家の許しを源氏に求めるが、病悩の紫上と一時なりと離れることを躊躇する源氏からの許しを得られないことで、「罪軽かるまじきにや」と「うしろめたく」嘆きつつ法華經千部供養会を主催する(495ページ)。この「いたり深く、仏の道にさへ通」う供養会を催すことで紫上は後世の幸いを願いつつも、自らの人生の果てることへの心細さを募らせる。

①昨日きのふ、例ならず、起きるたまへりしなごりにや、いと苦しうて、臥したまへり。年ごろかかる物のをりごとに、参り集ひ遊びたまふ人々の御容貌ありさまの、おのがじし才ども、琴笛の音をも、今日や見聞きたまふべきとぢめなるらむ、とのみ思さるれば、さしも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわたされたまふ。まして、夏冬の時につけたる遊び戯れにも、なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり。(498〜499ページ)

右の文の中の「我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり」とある紫上の姿について、鈴木日出男氏は、本来死という意味に使われない「行く方知らず」という言葉が死を示すことに注目し、死というものを現実から隔絶して考えようとしないう、現実的確かさもつものと捉えられ、彼女の絶望を意味づけられている。

いったい、この「御法」巻は、日増しに悪化を重ねる紫上の病状をもって、沈痛にも重々しく開始せられた。冒頭からの文脈をたどれば、まず、紫上の病態を皮切りに、それをいとおしみ嘆く源氏の苦慮、次いで、そういう源氏を気の毒だとする紫上、さらに、なまじの出家はせぬがましたとして一蓮託生を契った仲をかえつてうらめしく思う源氏、というふうな、交互に源氏→紫上→源氏→……の深刻な内面世界が語られてきた。それは、現実における源氏と紫上の関係が、どたんばに追いこまれ、つまり、来世という世界をのぞきこむようなかたちを強いられ、そこにおいてこの人間連帯が問いなおされたのだ、ともいいえよう。そのようにゆさぶられ、問われてみても、紫上には、いきなり現実から飛びあがってしまうことができなかつた。あくまでも現実を軸にして、その座標の上を揺れ動く紫上でしかありえないのである。すでに分析した紫上の思考がいかに現実的な確かさをもっていたことか。そして、そのためにつき

あたってしまった「行くへ知らずなりなむ」こそ、現実のぎりぎりの極点に達し、そこからのぞきみようとして、なおかつのぞきえなかつた死の実在であった、と読まれるであろう。それが絶望の把握でなくて何であろう。²

鈴木氏は、このように人間の連帯を問ひ直す深刻な絶望を指摘され、この思考の後紫上の心内がますます絶望の度を強め緊迫感にはりつめていくとされる。

この鈴木氏の「絶望」の指摘を受け、①の文中の「いみじうあはれなり」をめぐって、池田和臣氏は次のように述べられている。

御法の巻に多出する「あはれ」は、死にゆく紫の上自身からにじみ出たものであったのが、その尋常ならぬ緊迫した心中であるがゆえ、彼女ひとりの心では支え切れず、あるいは、冷静に一定の距離をもって叙する単なる地の文で受けることもできず、文章の流れは語り手の情意を要請したのである。切々とした作中人物の心中の苦渋を離れ、その離れの空間に語り手の感情を流露させ、その情感を溶媒として、あのうねるように生起する文体によつてもたらされた凄惨な心理をつつみこむ、という文脈のあり方によつて、御法の巻の世界と語り手と享受者の間に共生空間をかううじて保持しているのである。³

池田氏は、この巻に現れる「あはれなり」が語り手の情意を持ち出すことで彼女の凄惨な心理を包みこみ、語り手と享受者の共生空間を保持してその内的時間の解体をくい止めているとして「御法」巻の方法的特質を指摘される。池田氏の指摘される、語り手の情意を持ち出す表現は、語り手が作中場面から語り場面に顔を出しそこで作中人物の深い悲しみなどに共感するという内実をもち、根来司氏が、「賢木」巻野宮の別れの件りにおける「はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり」(85ページ)について、

ここはこのような彼と彼女(源氏と六条御息所・呉羽注)のかなしみをそのまま表現することをしないで、そのかなしみをあくまでととのえ「ものあはれなり」と表現することによつてそれを感じさせようとしているのであろう。と享受者はこのかなしみの情をそのまま出さずととのえた表現に、さらにいえばこのような情の昇華された「ものあはれなり」という表現に心からなる共感を寄せたであろうことは想像にかたくない。(中略) 当時においてはその作品で「ものあはれ」を目指して表現すると、それは享受者のほうにもそのまま受けとられるという道がついていたということにほかならない。⁴

と述べられた指摘を踏まえつつその方法的機能を「御法」巻の主題性において意味づけたものである。ここで根来氏の指摘されたかなしみ

の情を整えた、哀感の昇華をめざす「ものあはれなり」は六条御息所や紫上といった作中人物の感慨であるにとどまらず、語り手ひいては聞き手（享受者）にもその感慨を共有することを迫るものとしての内実をもつ。文中、享受者との間に「道がついていた」という点は今ほ措くとして、こうした「あはれなり」など語り手が作中人物と感慨を共有する表現を本稿で語り手の一体化の表現として捉えることとする。

なお、語り手の作中人物への一体化の表現は、「御法」巻においては「あはれなり」のほかに、夏になって、見舞いのため二条院を訪れた明石中宮と対面した際、中宮の皇子たちを見た折の、

② 上は、御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づることなし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに、もの心細き御気色はしるう見えける。宮たちを見たてまつりたまうても、「おのおのの御行く末をゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりにけるにや」とて涙ぐみたまへる、御顔のほひ、いみじうをかしげなり。（501～502ページ）

③ こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、来し方あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しく、すずるにもの悲し。（504ページ）

④……と聞こえかはしたまふ御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心になはぬことなれば、かけとめん方なきぞ悲しかりける。（505ページ）

右二例のうち、③は秋になって紫上の寝所を訪れた明石中宮から見た紫上の「いとかりそめに世を思ひたまへる気色」について、中宮が抱いた感慨であり、④は同じ対面の折、紫上の死をとどめられない源氏の悲しみを描くものであるが、同時に語り手の情意も重ねられているものと解することができる。

こうした語が見られる「御法」の紫上をめぐる記述について、榎本正純氏は、

語り手は、作中の紫上との深々とした一体感の中で今まさに死に行こうとしているかの女に対して「いみじうあはれなり」という共感

を吐露するが、ここに、紫上の内面を剔出しようとする作者の態度を看て取ることができる。⁵として語り手の情意の現れに作者紫式部の執筆時の思いを窺うことができるものとされる。また氏は、

作者は人物の身になつて書いてある、あるいは人物の心になつて書いてあるといつてよいのかもしれない。あたたかい思いやりと肯定の上に立つて中心的人物を形象化しているといえよであろうか。紫上に即していえば、作者はそれこそ深々とした一体感の中で、共感しつつかの女を形象化しているのだ。

と述べられているが、氏のこのような把握は、語り手の紫上への一体化というものが現存在たる作者の作中の紫上に共感する度合を大きくすることを意味するもので、作者の紫上への一体化として理解できる。

前述「いみじうあはれなり」は、鈴木日出男氏の指摘のように紫上の「絶望」（死を現実のものとしてそれと向き合い、孤絶したところでの生の姿）の表現であり、ここでの彼女の孤絶が源氏の現世での迷いを導きそこに現れた宗教的課題が薫に託されるという主題的道筋が示されるが、またこの表現が池田和臣氏の指摘のように悲しみの極限の自己の解体をくい止めるという方法的機能をもつものであり、更にこれらは榎本氏の指摘から紫上の絶望の裏に「あたたかい思いやりと肯定の上に立つて中心的人物を形象化している」物語の意志を示すものであるとすると、紫上の生をより肯定的な意味において捉えることができるのではないか。

そして、作者が紫上と心情の一体化の中で物語を推し進めていると見るとき、そうした紫上の心内の特徴的あり方のものを捉えることができると思うのである。

二 紫上の「身を惜しむ心」とその利他性

ここで「御法」に現れる「あはれ」の例を示す。「あはれ」の現れを見ることが、作者の紫上への一体感を辿るのに有効と考えるからである。

⑤みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけてどめまほしき御命とも思われぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。(493ページ)

⑥薪こる讃歎の声も、そこら集ひたる響き、おどろおどろしきを、うち休みて静まりたるほどだにあはれに思ざるを、まして、このころとなりては、何ごとにつけても心細くのみ思し知る。明石の御方に、三の宮して聞こえたまへる。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪尽きなんことの悲しさ(496く497ページ)

⑦親王たち、上達部の中にも、物の上手ども、手残さず遊びたまふ。上下心地よげに、興ある気色どもなるを見たまふにも、残りすくなしと身を思したる御心の中には、よろづのことあはれにおぼえたまふ。(498ページ)

⑧年ごろかかる物のをりに、参り集ひ遊びたまふ人々の御容貌ありさまの、おのがじし才ども、琴笛の音をも、今日や見聞きたまふべきとちめなるらむ、とのみ思ざるれば、さしも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわたされたまふ。まして、夏冬の時につけたる遊び戯れにも、なまいごましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり。(498く499ページ、①に示した文章)

⑨かくのみおはすれば、中宮この院にまかでさせたまふ。東の対におはしますべければ、こなたに、はた、待ちきこえたまふ。儀式など例に変らねど、この世のありさまを見はてすなりぬるなどのみ思せば、よろづにつけてものあはれなり。名対面を聞きたまふにも、その人かの人など、耳とどめて聞かれたまふ。(500ページ)

⑩上は、御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づることなし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに、もの心細き御気色はしるう見えける。宮たちを見たてまつりたまうても、「おのおのの御行く末をゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや」とて涙ぐみたまへる、御顔のほひ、いみじうをかしげなり。(501く502ページ)

⑪とりわきて生ほしたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはんこと、口惜しくあはれに思されける。(503ページ)

⑫かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば、おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだる萩のうは露(504く505ページ)

⑬やむごとなき僧どもさぶらはせたまひて、定まりたる念仏をばさるものにて、法華経など誦せさせたまふ、かたがたいとあはれなり。

(512～513ページ)

これら「あはれ」の現れにそって紫上の心のあり方を見ていくと、⑤「年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にも、ものあはれに思されける。」では、紫上が自分の死後にとり残される源氏を思いやるものであるが、こうした源氏への配慮は、三月の法華経供養会の場面の⑥と⑦では我が身の差し迫った切実な死の予感を紫上が一人背負うという形を呈し、⑧（①の文章の概ね）で、その哀切が紫上一人に担われることが不可能となり、語り手の情意へと代わらざるをえない。このような形で語り手が紫上と一体感をもつことにより紫上への作者の共感が促されていく。

⑨は夏になって明石中宮の見舞いを受けた折の紫上の感慨であるが、「この世のありさまを見果てずなりぬる」ことの哀切の思いは紫上のみの主体に支えられるものではなく、語り手に共有させられている。それは作者の共感を示すものでもある。

しかしそうした紫上について、それ以降、新たな様相を見ることができ。かつての重患を契機に、

・世の中に亡くなりなむも、わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、（「若菜」下巻242ページ）

・みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけどどめまほしき御命とも思されぬを、（493ページ）

などであるように現世に執着をなくしたはずの彼女に、「身を惜しむ」心が現れてくるのである。

こうした紫上の、源氏以下の親しい人々に向かう利他性をもった心情の表れを、次に纏めて掲げてみた。

⑭みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけどどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。（493ページ、

⑤に掲げたものの再掲出）

⑮儀式など例に変らねど、この世のありさまを見はてずなりぬるなどのみ思せば、よろづにつけてものあはれなり。名対面を聞きたまふにも、その人かの人など、耳とどめて聞かれたまふ。（500ページ、⑨の後半を再掲出）

⑯宮たちを見たてまつりたまうても、「おのおのの御行く末をゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじり

けるにや」とて涙ぐみたまへる、御顔のほひ、いみじうをかしげなり。(501～502ページ、⑩の後半を再掲出)

⑦ゆゆしげなどは聞こえなしたまはず、ものついでなどにぞ、年ごろ仕うまつり馴れたる人々の、ことなる寄るべなういとほしげなるこの人かの人、「はべらずなりなむ後に、御心とどめて尋ね思ほせ」などばかり、聞こえたまひける。(502ページ)

⑧三宮は、あまたの御中に、いとをかしげにて歩きたまふを、御心地の際には前に据ゑたてまつりたまひて、人の聞かぬ間に、「まろがはべらざらむに、思し出でなんや」と、聞こえたまへば、(中略)

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、(以下略) (502～503ページ)

⑨かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば、おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、
ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん

と聞こえかはしたまふ御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心になはぬことなれば、かけとめむ方なきぞ悲しかりける。(504～505ページ)

⑬は2行目に「いみじうをかしげなり」と一体化のことばのある記事だが、そこで「身を惜しむ心」が見られる。その「惜しむ心」は、源氏をはじめ残される人々を見守り彼らに働きかけを行うことができないことを嘆くという形をもつ点が特徴的といえる。

更に、⑭では自分に仕える女房たちの中で寄る辺ない者たちの世話を「この人かの人、「はべらずなりなむ後に、御心とどめて尋ね思ほせ」と、一人一人名前を挙げて明石中宮に託しており、⑮では、死後にのこる二条院の紅梅と桜の後見を「花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と、匂宮に託すことで匂宮の行く末に思いやりを見せる。

また⑩では、自分の死に源氏が「おぼし騒」ぐことを慮って、「あはれ」を催して、「おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露」の歌を詠む。この「あはれなれば」には源氏に対する思いやりと憐れみの情が窺われる。

右に見た紫上の心のあり方は、彼女への一体感により作者紫式部の心の形（いわば操作者としての心）をもその悲しみの中に植え付け、そこから操作の心も移されて現れたものとして理解できるのではないか。

『紫式部日記』には、自己の姿を他者の視線から隠そうとしつつ他者を見つめようとする紫式部の姿勢が見られる。それが紫上や宇治大君の独自の心に反映している点を以前に明らかにしたことがある。が、例えば、「若菜」上巻以降に見られる、他者の目を鋭敏に意識して自己の暗部を曝すことを極度に避けつつ鷹揚さを保とうとする紫上の姿勢は、『紫式部日記』の中で作者式部の思考・行為として特徴的に見られるところである。紫上の場合、そのような心の形の同一化を更に進めて、物語作者として作中人物を操作し働きかける姿勢が、彼女の中に移されていったと考えるわけである。それは紫上の哀切な生意識に同化しつつ彼女の最後の時間を作者が描き出す中でおのずから促されたものである。紫上の悲しみは、作者の、見る側の人としての意識を反映し、作者の作中人物を愛おしむ思い入れの如きものが付随したために、それぞれの場面での紫上において他者への配慮などの利他的な言動となったのではないか。このように紫上の悲しみは、作者の物語執筆に向かう心を反映した、現世と関わることの中断を嘆く思いとして現れるものであったといえる。

こうした他者への働きかけの意志は、「若菜下」巻重患の後、源氏が「消え残」った自分の介抱に心を労することで女三宮が軽んぜられることを苦慮し、女三宮の居所へ行くよう源氏に促す姿と響きあう。

つれなしづくりたまへど、もの思し乱るるさまのしるければ、女君、消え残りたるいとほしみに渡りたまひて、人やりならず心苦しう思ひやりきこえたまふにやと思して、「心地はよろしくなりにてはべるを、かの宮のなやましげにおはすらむに、とく渡りたまひにこそいとほしけれ」と聞こえたまへば（以下略）（255〜256ページ）

この件りの意味づけについては、倉本直美氏によって行われている。が、なお、ここでの紫上の源氏への言は周囲の穿鑿を避けようとする彼女特有の思いから発せられたものである点も考慮すべきであると考ええる。

三 「御法」巻の紫上の位境

田辺聖子氏は、「幻」巻を読み終えたところで、紫上を失い失意の中に佇む源氏の姿を叙したこの物語に、「不思議にさわやかで静謐」なものを読み当て、次のように述べられている。

自分の死の悲しみよりも、あとに残る源氏を思いやる、無我の大きな愛に紫の上はみちみちている。光明遍照十方世界は紫の上の心にある。男の好色心に何度か絶望し、男と女の間の埋めがたい深淵を嘆きつつ、なおそれを超えて紫の上は源氏を大きい愛で抱擁する。⁹

この指摘は、前掲⑭及び⑰の本文記述から導き出された解と思われ、紫上が一個の作中人物の立場を離れ、より高次な精神的位境に立ち、源氏を含めた人々に好意的眼差しをもって見詰め愛情を投げかける姿を呈することを示すものであるが、紫上の視線には物語作者の視線との重なりを見ることができ、作者は、物語の展覧者・操作者として時に作中人物に寄り添い、時に離れを行う。紫上とともにその迫りくる死を体験した作者は、更に紫上に一体化しつつ自らの視線を彼女に与え、人物を高めから見つ源氏に愛を及ぼす営みを彼女と共有したのではないか。こうして作者は、紫上が源氏以下彼女と心を交わした人たちの別れを惜しみ、死を前にした哀切を他者への愛情とともに描き出すことで、紫上の新たな理想像を作り出したと考えられる。

鬼東隆昭氏は紫上の死をめぐる叙述について、

「御法」の巻で紫上の死が語られ、「幻」の巻に連続して、源氏の悲嘆が描かれている。主人公が最愛の妻を喪った嘆きを描くのであるから、「御法」「幻」両巻は源氏物語の中でも最も悲しみに満ちた巻々であるはずである。しかし、この両巻を読んでいって私は妙に明るい甘美さ、安らかさの中に浸っていることを感ずるのである。これは私だけの感じであろうか。作者自身がそのような明るさ、安らかさ、もつといえれば幸福の中に浸りながらこの両巻を書いていたら私には思えるのである。この両巻は光源氏の悲嘆を描きながら紫の上の幸福ひいては光源氏の幸福を描いているのだと思う。¹⁰

と述べ、源氏の悲嘆を描きつつ作者が紫上の幸福・源氏の幸福を描いているとされる。氏の述べられる幸福は、

葵の上の時には妻に先立たれた夫としての喪服のきまりがあつて薄墨の喪服しか着られないのであつたが、紫の上の場合はそのきまりを破つてもっと濃い喪服を着ている。実は紫の上のような場合には夫は喪に服さないのがきまりであつたと思われる。(中略)

「若菜」上下のあの手の込んだ事件も畢竟「御法」「幻」に至るための手続きに過ぎないのではないかと思われてくる。「若菜」の事件はそれ以前のいわゆる第一部から必然的に展開して行くこと、作者の体験にかかわる論理と物語自身の要請する論理などを総合的に把握してこのあたりの問題を考えなければならぬと思つてゐる。

とあるように、源氏の妻として十分な待遇を受けた形の満足という意味でもあるが、更に読みを進めれば作者の描いた幸福とは、作者が紫上との一体感によつて作り出した源氏へのいたわりと、彼女の死後それを確かめつつ紫上非在の時間を生きる源氏の悲しみの中に二人の強い絆を確かめ得たことに由来する。

「妙に明るい甘美さ、安らかさ」は、前掲の⑩「御法」巻の秋、源氏・紫上・明石中宮の三人の唱和の中に見ることが出来る。そこでは死を目前にしたところで相互の連帯によつて作られる時間が、語り手との一体感の中に確保されている。源氏・紫上の詠歌のやりとりを見守る明石中宮の「秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん」の歌は、世の無常のことわりを示して、別れのひとときを静かに嘆く二人を包むいたわりを感じる。「悲しかりける」には明石中宮に一体化して紫上の死を惜しむ作者の悲しみが読みとれる。

このような紫上の姿を、「御法」巻冒頭の「罪軽かるまじきにや」と嘆いた彼女の罪障との対峙を経て高次な精神の位境に至つたものとして捉える見解もある。丸山キヨ子氏は、

切望する出家が拒まれたとき、紫の上はその拒否を、こぼむ人のせいにしていつまでもそこに佇んではいかなかった。むしろ、その背後にある自らの宿世とむき合つた。そうして、それを罪障を負うている自己の存在そのものとして対峙した。¹¹

とされ、紫上の生を「罪軽かるまじきにや」の自覚から「自らの宿世とむき合い」、「救いの第一歩を既に踏み出し」たものとして捉えられている。紫上の罪障意識に発する「御法」巻の精神的鍛錬については、あらためて考えるべき余地のある問題と思うが、その際、⑩などに紫上の救済の形が読み解ける彼女の位境を示す論として十分参考にした。

また、塚原明弘氏は紫上の往生の可能性を、「のぼりにし」という遠回しの表現に読みとり、それを、源氏への愛執の中に死を迎えた紫

上に対しての作者の精一杯のはなむけではないかとされる¹²が、その表現を作者の一体化によるものと見ることは可能であろう。

結語 「御法」巻から「幻」巻へ

述べてきたように、「御法」巻において「あはれなり」など語り手の紫上への一体化の表現に作者の共感を見ることができ、その共感が作者固有の心の形、ひいては物語展舒の姿勢さえも紫上に投影することになったという物語の様相を窺うことができる。本稿では作者の思いの投影という点からこの巻の紫上像が特徴づけられることを指摘した。紫上を哀惜する作者の心とともに作中人物を操作する意識、眼差しを移し植えることで、死を前にした彼女の中に源氏を含めた人々への愛情を確かに描き出すことになったといえる。紫上の「絶望」がこうした経緯を背景に源氏への思いやりを伴うものであることを考慮する必要がある。

神野藤昭夫氏は、「御法」「幻」が相互に等質な巻としては一括できぬ面を示しつつ一對のものとして用意され、源氏⇨紫上の愛の物語として捉えるあり方を確認できるものとされている。

御法・幻が方法的に等質な巻として一括できぬ面を示しつつも、光源氏の生涯を閉じめるべく一對のものとして用意されたものであることは疑えない。御法巻で、幻巻における光源氏のあの哀傷に見あうほどに、多くの共感と哀惜のうちに紫上が死なしめられてゆくことは、結局、正篇の物語世界を、光源氏⇨紫上の愛の物語として閉じめようとする作者の志向によるものにはかならないのではない¹³か。

本稿で行った紫上像の把握の上に、こうした見解を踏まえつつ、更に「幻」巻での源氏の孤愁、紫上愛惜の姿の意味を見ていきたい。

注

- 1 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男の各氏校注・訳小学館新編『源氏物語』による。
- 2 鈴木日出男氏「紫上の絶望―「御法」巻の方法―」（『文学・語学』第四九号、昭和43・9）。
- 3 池田和臣氏「紫の上終焉の筆致―御法の巻の表現構造―」（『むらさき』第一三輯、昭和50・6）。
- 4 根来司氏「平安女流文学の文章の研究―枕草子、源氏物語、紫式部日記を中心として―」（昭和44・10、笠間書院の「源氏物語の文章（一）」）。
- 5 榎本正純氏「表現と解釈―紫の上について（続）―」（『和歌山大学教育学部紀要人文科学』第四九号、平成11・2）。
- 6 拙稿「宇治十帖における〈見られる意識〉」（『文藝研究』第一〇九集、昭和60・5）、「物語創作における視座」（『源氏物語講座4』、平成4・7、勉誠社）を参照いただきたい。
- 7 寛弘五（一〇〇八）年九月十一日早朝の中宮彰子の敦成親王出産の際、女房殿上人たちが密集する中、殿上人と顔を見あわせた女房が興奮に面変わり露わになったことにごだわる紫式部の心中思惟や、同年十一月二十二日、童女御覧の折公卿殿上人など多くの人々の視線にあえぐ舞姫たちの苦しげな姿に同化する式部の姿など。
- 8 倉本直美氏「若菜上・下巻における紫上の苦悩とその克服」（『金城国文』第六六号、平2・3）。
- 9 田辺聖子氏『源氏物語』の男たち（平成2・1、岩波書店）I「ミスター・光源氏の場合」。
- 10 鬼束隆昭氏「紫上の死」（『日本文学』昭和49・10）。
- 11 丸山キヨ子氏『源氏物語の仏教』（昭和60・2、創文社）。
- 12 「火葬の煙への言及がもう一度ある。秋好中宮の弔問の歌に対する源氏の返歌である。／のぼりにし雲ながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に（五〇三頁）／中宮への返歌の体裁を借りつつ、「のぼりにし雲は、煙になった亡き妻への呼びかけでもある。（中略）紫上の死と葬送の描写の中に極楽往生の確証を見出そうとすれば、ここにしかないと思われる。」（塚原明弘氏「紫上の死と葬送の表現」、『中古文学』第五三号、平成6・5）。
- 13 神野藤昭夫氏「晩年の光源氏像をめぐって―幻巻をどう読むか―」（今井卓爾博士古希記念論集編集委員会『物語・日記文学とその周辺』昭和55・9、桜楓社）。

